

挨拶



早稲田大学 大学院会計研究科長 佐々木 宏 夫

早稲田大学大学院会計研究科長の佐々木でございます。一言ご挨拶申し上げます。

私どもの研究科は、今年で開設10周年を迎えました。先日10周年記念のシンポジウムを開催したところでございます。設立当初から、理論と実務の融合ということ、私どもの研究科は標榜しておりまして、大学というアカデミックな組織で、実務界との深い関係の中で実践性の高い研究教育をやっていくことが、私どもの研究科の趣旨でございます。そういう点で、今回のこのフォーラムは私どもの理念に非常に整合するものでございまして、会計研究科として、後援という形でご協力をさせていただくことにいたしました。簡単に今回のフォーラムについて、私の考えを少し述べさせていただきます。

ご存じの方も多いかと思いますけれども、私は会計学者ではなく公認会計士の資格も持っていません。専門は経済学でございます。ただ10年間会計研究科に関わっていて、多少は会計のことも分かってきたということと、それに加えて経済学の立場から今日のフォーラムのテーマをどのように理解していったらいいのか、ということを考えるのは、個人的にも楽しいことですので、そういった観点から少しお話しさせていただきます。

今年の夏、ある会計の歴史の本を読みました。ルカ・パチョーリから始まって、現代の会計のいろいろな問題点に至るまで、会計が直面するさまざまな問題を網羅する大変興味深い本でした。私は、その本からいろいろ教訓を引き出すことができました。

ご存じのように、15世紀にイタリアのルカ・パチョーリという非常に偉大な数学教育者が、いわゆるベネチア式簿記、すなわち、現在の複式簿記にあたるものを体系的にまとめました。そこから現代に至る会計学が始まったわけでございます。パチョーリという人は、大変明晰な頭脳を持った人のようでありまして、彼がつくった複式簿記の体系というのは、いまだに生きているわけでございます。

これは非常に素晴らしいことでもありますけれども、その反面で、15世紀とくらべて金融商品などを含めた非常に複雑かつ抽象性の高い商品が取引されるような現代において、企業の真の姿を表現し企業活動を評価するための重要な手段である会計と、現実の経済社会の実態との間に徐々に乖離が出てきていることも事実かと思えます。

パチョーリ以来の体系の1つの問題点は、「時間」という企業活動にとって極めて重要な要素を必ずしも適切に反映できるシステムになっていないことです。これには、やむを得ない事情がございます。数学で時間というものをとらえられるようになったのは、ニュートン力学に代表される微

積分学が生まれてからですので、それよりも約100年も前の数学者であるパチョーリが、時間という概念を彼の体系の中に落とし込むというのは、もともと無理なことであったと言えるでしょう。

しかし、現代の企業社会においては、企業は時間の中で生きており、時間の中で意志決定をしているわけであり、もちろん簿記において時間をとらえるための工夫はなされています。すなわち、いわゆるフローとストック、つまり存在量と変化量を区別して考えるという非常に巧妙な工夫を行ってきたわけであり、しかし、それでも果たして今の企業社会のダイナミックで連続的な変化に対して、今の会計、あるいはパチョーリ以来の複式簿記が、それを適切に表現する手段になっていないのではないか、ということを感じました。

次に、もう1つの問題は、その本でも指摘されていることですが、経済社会には市場機構がうまく機能しない領域がたくさんあります。経済学ではこれを「市場の失敗」と呼んでおりますけれど、外部性や公共財など市場機構が適切に機能していない状況が多々あります。そして、われわれの今生きている社会の中では、企業にしても、個人にしても、実はそのような外部経済効果や公共財などの恩恵を非常に受けていたり、逆に市場の失敗の弊害に悩まされたりしているわけです。

これについても、市場経済が未発達な15世紀には、市場の失敗を考える必要はほとんどなかったわけですから、当然パチョーリの体系の中で、環境問題であるとか、社会的なインフラであるとかいった市場の失敗に関わるものを表現するのは、非常に難しいわけです。

さて、本日のフォーラムの課題になっております「統合報告制度」は、会計学者の皆さん、あるいは法学者の皆さん、それぞれの視点で理解が多少は異なっているかもしれませんが、私も経済学者の目から見ると一番興味深いのは、「市場の失敗」の存在が明らかな現代社会の中で、それを考慮しながらどうやって適正に企業活動を評価していく枠組みをつくっていくのかという論点です。その意味で、非常に本質的な経済学の問題が内包されているテーマではないかと私は理解しております。

そういう点で言えば、本日のフォーラムは、単に会計と実務の出会いというだけではなく、もう少し深い社会経済に対する、われわれの認識を深めるための場にもなるのではないかと期待しているところでございます。

こういった観点から、本日は非常に面白い議論が展開されることを期待しています。本日は、優れた先生方と実務家の皆さんにお越しいただいて、しかも、私たちの誇るべき同僚である中村先生が中核になって企画されたフォーラムですので、とても意義深い議論が展開されることになるであろうと思っております。

私も一聴衆として聴講させていただきたいと思っております。

簡単でございますが、私のあいさつに代えさせていただきたいと思っております。本日はどうもありがとうございます。